

# 教育をこう考える (上)



伊藤 昇

今日、私が与えられた演題、「教育をこう考える」ということにつきまして、私がおもいつくままに話をさせていただきます。

## 一、私と教育

私は自己紹介の意味で述べさせていただきますと、昭和六年からの朝日新聞の新聞記者でありまして、三十二年四月つとめて三年前に停年退職しております。長い間、新聞記者をしていた私、なぜ教育などということにロバシを入れていくか、又、なぜ教育などということに関心をもったか、を一つ聞いていただきたいと思ひます。

私が教育ということを考え出したのは、今から二十一年前、日本が戦争に破れた八月十五日に、私に残る人生があるならば、教育ということを考えて生きていきたいと思つたのです。これには

少し説明が必要なのですが、私は、太平洋戦争の間、日本にはいませんで、ヨーロッパをふらふらしていました。と申しますのは、昭和十五年、朝日新聞でフランスに行けという命令がありましたので、それまで朝日新聞のバリ特派員をしていた渡辺紳一郎さんの後任として行きました。昭和十五年に、アメリカを回りまして、フランスに行つたわけですが、フランスで一年半ばかりして、昭和十六年に太平洋戦争が始まつたわけです。その後、フランスはドイツに占領されたので、仕事がしにくいので、中立国のスペインに移つたのです。そして、スペインには四年おりまして、終戦の時には、マドリッドにおりました。それから半年留め置かれまして、昭和二十一年、今から二十年前に、在ヨーロッパの日本人全部と一しょに、ヨーロッパから送り帰されました。その八月十五日、私は、マドリッドにおりまして、そこで、日本の

無条件降伏、自分の国が敗れたということを知ったわけです。その時、私はどうしたのか日本を建て直すには、教育以外にはないのだと考えました。

これにも実は説明を少しつけなければいけません。

それは戦争に敗れたという時に、私は、自分の国が戦争をして、敗れたということから、いろいろのことを考えてみました。なぜ戦争をしなければならなかったかなど、いろいろ考える中に私は自分をふり返ってみて、自分という人間が、非常にひきょうな人間である、権力に対して反抗もできなければ、抵抗もできない人間であったというようなことを、自己反省したというわけです。今申しましたように、戦争の始まる一年半前、私は一人でアメリカを歩きながら、こういう国と戦争をしてはならないと、私なりに考えたつもりでした。しかし、そういうことを考えていながら、新聞記者である私が、戦争をしてはならないということ、一行も書いていないわけです。ということは、後になっていい分けのようですが、書いたところで、その当時、言論統制、言論圧迫ということがある中では、読者の目にはとまらないということもあったわけです。しかし、自分の祖国が、非常に大きな危険にさらされている時に、言論統制があろうと、圧迫があろうと、言論人である以上はいいたいことは、いわねばならぬのだと思ひ、そういう、勇気というものを欠いておった自分が、かわ

いそうになったのです。そして、そういう、意気地のない人間、自分がどういう環境からつくられたのであろうかということ考えた時に、私は、やはり学校教育の中になにか間違いがあったように思われてなりませんでした。

それは学校教育ばかりでなく、今考えるとおかしき位の、家族制度、家父長制度、一軒の家の中で、父親だけが唯一の権力であり、長男である私にとっては、母親は全然こわくも、恐しくもなかったわけです。父親だけの命令に無条件に服従しなければならなかったというのが、戦前の家族制度でございませう。学校教育においては、先生が絶対の主権者であり、先生のいわれることは、たとえ、嘘でも、そのまま覚えなければならなかった。少し極端かも知れませんが、教育は、上から下へつき込むだけで、児童の立場からいけば、先生のいわれることは、無条件で服従しなければならなかったというのが、過去の教育だったと思ひます。その点、今日の教育から比べると、相当の違いがあるわけで、そういう中でつくられる人格というものは、上から命令があったならば、なんでもついていくと、こういう人間が家庭の中、学校教育、さらに、人間が上下関係で結ばれておった日本の古い型の社会の中で、そういう人格が、つくられておったと思ひます。従って、私、自分自身が、非常に行届かない、思慮のない、勇気のない人間であったと認めながらも、そういう人間がつけられた環境、教

育というようなものを、根本的に改めなければ、日本の再建というものは、できないのではないか、新しい日本が生まれるためには、どうしても、教育のことから変えなければならぬというふうに思ったわけです。

特に、私が、教育のことと、それを結びつけましたのは、日本に七年間残しておいた自分の子どもを頭においていた時に、この子どもには自分が受けてきたような教育は受けさせたくないし、自分が歩んできた意気地のない人生は歩ませたくないというのが、私のその時の考え方でした。つまり、子どもは子どもなりに自分の意志というものを持って、自分の人生を自分で切り開いて、人生を歩んでもらいたいと願ったわけです。

それで、翌年日本へ帰りまして、新聞社に、日本の再建は教育以外にないから、教育ということを考えさせてくれと頼んで、その頃から教育ということに口バシを入れたわけです。私は、少なくとも家庭においては子どもたちには、この父親に対して間違っていると思ったら、どんな喧嘩をふっかけてもよいし、どんな議論をふっかけてもよろしいと、それでも気にくわなかったら、この父親に噛みついてでもよろしい、自分で正しいと思うことは、どこまでも貫いて行きなさいというふうに教えてきたつもりです。そうしたら、私の理想通りの子どもができました（笑）歯のつよい、噛みついてばかりいる子ができました。で、噛みつくところ

を間違えてすねばかり噛みつくという、すねかじりになったわけです。でも、素人の教育論などは意味のないものだと思っただ次第です。だから、どうぞ、これからの私の話は、まじめに聞かないように願います。（笑）

## 二、新教育の歩み

終戦の翌年日本へ帰りました時に、アメリカから教育使節団がきておりまして、あの有名な「Hissom Report」という、アメリカ教育使節団勧告書というものを出して、まあそれと同時に、私は子どもが通っておりました附属小学校に行きまして、新しい教育について教えを受けながら、今日にきております。

第一日に講演をなさった波多野先生や、他の先生方にもいろいろ御指導を願って、なにしろ素人で教育というものを考えるのですからなにか間違いはかりしていますが、しかし子どもの学校、その他で、新しい教育というものについて歩くうちに、私気がつきましたのは、日本の子どもを良くするためにはどうしても、母親にしっかりしてもらわなければならないということだったのです。父親はどうでも良いということではありませんが、終戦の混乱した中では貧しいながらも、父親は多忙をきわめていたわけで、従って、PTAなどの席へはかならず母親がでたわけです。私は、そういう母親を見ているうちに、この日本の母親が、

すっかり新しい時代というものを身につけることによって、育てられる子どもたちは、正しい人間になるのだと思つたわけです。

そのころから私は、婦人団体や婦人グループ、PTAの動きをながめながら、また、お手伝いをしながら見てまいったわけですが、新教育が進み、日本の経済成長の歩調が高くなればなるほど、日本のお母さん方が変になってきちゃったのです。教育に対する母親の構えというものが大きく変わってきているように思えます。いわゆる教育ママという、非常にいやな言葉ですが、見当違いの教育ママというものができてくることは、おそらく保育、幼児教育に携わっている皆さまは十分に御承知だと思います。

どうして、そのようになったかと、過去二十年間の新教育の歩みというものをふり返って見ますと、私たちが考えなければならぬいろいろな問題に突き当たります。その一つは、学校が、ある場合には幼稚園といつてよいと思いますが、子どもにとって、苦しみになっている、学校へ行くこと、勉強することが、子どもにとって楽しみではないことに、大きな間違いがあるのです。

皆さんご存じの佐多稲子さんにお会いした時、伺ったのですが、佐多稲子さんは、お孫さんが、庭で、お友だちと遊んでいたで、「皆さん、学校はおもしろいでしょう」とお聞きになったら、いたずら盛りの小学校二年の子どもたちが、目をくるくると見合せて、「学校なんて、おもしろいはずないよな」といっ

たそうです。これは私にとって非常に驚異なのです。

私は東京の小学校なのですが、私は小学校へ行くことが本当に楽しみだった。日曜日、親父に頭をなぐられるよりも、学校へ行っている方が、ずっと楽しみだった。学校は、楽しいところだったのです。ところがどうでしょう。皆さん見ていられるいまの子どもたちには、学校が苦しみなのです。どうしてそういうことになってしまったか、それは学校においても、家庭においても、勉強するというこの意味が変わってきてしまっている。一口に申しますなら、日本の競争社会と申しますか、入試競争と申しますか、本当に身につけなければならぬ勉強というものがなくなつて、ただ上からぎゅうぎゅうとつめ込まれる教育になってしまったからだと思ひます。

つまり、日本的な社会現象としての競争社会からくる、特に、有名学校というものに集中する入試制度というようなものから、教育の本筋が、すっかりはずれてきてしまっていると思うわけです。そして、その歪んだ教育観というものの中に、母親たちが巻き込まれてしまっている。本当に正しく人間として幼児を育てるといふのではなく、ただ競争に打ち勝っていくだけのための人間形成、勉強というものを押しつけていく。ここに今日の日本の教育の誤りがありますし、新教育が二十年間歩んできて、落し穴にはまっているという感じがしてならないのです。

それには、教育についての考え方が、もう一つ変化していることを見逃すわけにはいきません。

それは、日本社会が、大ざっぱにいつて、戦後前半は戦前への回復の十年間で、昭和三十年前後から、経済成長の時代に入っているのですが、この経済の成長と同時に、国民の生活水準が上ってきて、戦後では、能力さえあれば、誰でも大学へ行けるというふうな教育制度が変わってまいりましたので、子どもたちには皆大学へ行ってもらおうということになって、猫も杓子もという位に、大学へ行くようになった。そして、大学の方は格差ができて、いわゆる有名大学ができる。そこへ集中する。その為の勉強をする。つまり、教育の機会均等、機会拡大、生活水準の向上ということで、ただ人間は大学へ行けば良いという誤った考えが二重に写し出されているわけです。そうして、その教育観の中で、母親たちもみくちやになっている。母親は幼稚園に連れてきたところから、この子を天才のようにさせてくれというような願いを持ってゐるのです。このような戦後の教育観に対して、今日は、根本的な変革期にきていると思います。このことは、私の今日の結論のようにして、話を進めたいと思います。

### 三、日本教育の混乱

日本の新教育を振り返って見ると、あらゆる点で混乱にぶつか

っているとと思います。これは私だけの意見ではなく、小学校から高等学校の校長会でも、日本教育が当面しているさまざまな混乱を指摘しています。

幼児教育に関していうと、日本には本格的な行政がないといえると思うのです。たとえば四国においては、徳島は幼稚園が多いが、高知は少なく、代りに保育所が多いのですが、同じ五才児に對しても保育所と幼稚園という別の施設を与えるということに関して、政府はあまり深く考えていないようです。

そのように、幼児教育というところに大きな問題が起ってきている。それに対しては、先日中村文部大臣が思いつきのように、五才からの義務教育をするなどといっていますが、専門家の研究上の改革でなく、幼児教育においては、まだまだ政治家とか、一部の人の思いつきのような点で進められているので、こういう点においては、今日では、根本的な対策が必要だと思えます。

幼稚園については、そのような事情がありますが、小学校について見れば、小学校の校長会において、今日の小学校教育について、次のような正式声明をしています。「今の小学校においては、教えることが多く、先生は疲労困憊している」ということです。

皆さんも御承知の通り、今の小学校の子どもたちの勉強では、質より量の方が多いので、先生方より、子どもたちの方がまいつているようです。小学校の三年位で二つかばんを持って歩いてい

るんですよ。一つには、ワークブックや何かが入っていて、くたくたになっているんですよ。だから、学校なんか、おもしろくないよなーということになるんです。

それより、根本的に教育ということについて考えなければならぬことは、これは後にふれますが、今、子どもに教えてやりたいことは山ほどあります。しかし、学校の先生がどんなに勉強したって、子どもの質問に答えてやれないのが今日です。たとえば、小学校三年の先生がいつていたのですが、今の子どもたちは、アメリカの宇宙ロケットがドッキングすることは、テレビジョンで全部知っていますよ。それを昨日見た三年の子が、宇宙であんなことできるの、どうやってできるんだと聞くんです。先生、とてもこれ説明できるものじゃないですよ。仕方ないから「良く、しっかり勉強して大学へ行きましょう」とかなんとかごまかしてしまいます。これが今日の学校教育です。

今、ちょうど、ふれたいと思ったのですが、マス・コミュニケーション、新聞、テレビ、ラジオ、映画、週刊誌、また子どもにとつては、マンガ、これは、全部、マス・コミュニケーションです。そのマス・コミュニケーションの影響を全面的に受けている子どもに対して、私たちが受けてきたと同じような教育方法、教育内容に問題点があるわけです。

私たち、大正に、小学校、中学校を終えた人間は、子どもの頃

は、一切マス・コミュニケーションから遮断されていました。子どもは新聞を読んではいけない。映画を見てはいけない。ラジオがようやくはじまった時代です。テレビジョンはもちろんない時代ですから、私たちの時代、または、あなた方のお父さん、お母さんの時代は、学校で教えられること、家庭で躰けられることが直結されて、人間形成がなされていたのです。今の教育では小さな子どもでも、誰も教えないことを、みんな覚えてしまっているのです。つまり、現在では、学校で先生に教えられることと、家庭で躰けられることの他に、マス・コミュニケーションによって、直接に教えられているのが、人間形成の場になっているのです。

暇の方があつたら計算してみると良いですが、六才〜十八才の間、学校で受ける授業の時間とラジオ、テレビ、映画、つまりマス・コミュニケーションにふれている時間を比較しますと、後者の方が長いのです。それが、人間形成に深く影響を与えているわけです。このような傾向がある今日において、明治から余り変らない教育の内容や方法で良いのか、ここに一つの問題があると思えます。

次に中学の先生のいい分は「六・三・三制は訂正しなければならぬ。十二才〜十五才の青年前期の子どもたち、大切な思春期にある子どもたちに、わずか三年では、十分な人間形成ができて

い。三年では足りないから、四年にせよ」と主張しているのです。これも、全面的な教育改革の一つの話題になると思いますけれど、確かに、今の中学を見てみますと、小学校から入ってきた時から高校の受験の準備に入っています。大切な少年期、青年期を、非常に良く書いているのが、井上靖さんの「夏草冬濤」という小説ですが、これは、男の子の大切な時期について一番良く書いてあります。こういう大切な時期、人間形成の中で一番大切な時期を、三年ではいけない、四年にしろと、中学の先生方はいつているわけですね。

高等学校の段階になりますと、東京都では、特に、学校群ということで騒がれましたが、入試科目三科目にするというようなことは、小、中学校が、高校入試があるために、本来の姿からはずれてしまっているのです、そのしわよせをなんとかしようということからです。東京都では、そういう案が出ているにしろ、とにかく、高校へ入れば、ただ大学の受験勉強をさせることになり、本来の高等学校教育の目的からはずれてしまうのです。

これらは、日本の特徴である、高校入試、大学入試の一連のつながりが、小学校、高校の歪んだ姿を作り出していることを示しているものであって、つまり、こういう点から、六・三・三・四制に対する批判が強くてくるわけです。そして、これが今日の日本の教育の状態だと思います。

また、大学も問題を抱えています。つまり、大学のマンモス化です。受験、受験でやってきた子どもたちが入ったところがマンモス大学です。大きな講堂で、マイクで、教師らしき者がしゃべって、さつと帰ってしまう。質問一つできない。まじめに勉強しようと思う学生ほど、失望しています。今度は語学の授業だと、行ってみたとところが、席がない。五十名位の教室に、三倍位、入学許可してあるのですからね。その上、授業料の値上げだなんていわれれば、失望している子どもたちの胸が爆発するのは当然です。これは、私、なにも早稲田についてだけいっているのではなく、今の大学ほとんどについていえることだと思います。

そういうふうと考えてみますと、幼稚園から大学まで、日本の学校制度というものは、もう一ぺん、根本的にやり直さなければならぬところに来ております。

それがちょうど、今、文部省がやっておりますところの、後期中等教育、高等学校年代の教育を変えるところで、教育課程の改訂（これは来年までかかりますが）これらができたところで、日本が戦後二十年やってきました六・三・三・四制を全面的に変えなければならぬという必要性から、文部省中心に、中央教育審議会中心に、学校制度改正の問題が進められるのでないかと私は思います。

今、述べましたように、ここ数年来というものの日本の教育がい

ろいろと混乱を見せていることから私は、どうも新教育の六・三・三・四制というものが、日本の風土に、うまく根をおろさないといいことを感じ、また日本の家庭における子どもの扱い方に疑問が出ましたので、五年前に一人で、アメリカの教育の現場と、家庭における子どもの扱い方というようなものを、自分なりに見てこようと思って、一まわりしてきました。さらに一昨年、東南アジアから、アフリカ、中南米、ラテンアメリカ諸国を歩いてきて、私なりに、いろいろなことを考えておりますが、まず、子どもの扱いということについて、感じましたのは、日本では、子どもを非常に甘やかしているということです。

私の関係している目黒のある幼稚園の先生に聞いたのですが、ある二人の子どもがじゃんけんをしていた。二人ともパーを出す。何べんやってもパーを出す。そのうち一人が、お前ずらいぞ、グーを出せばいいじゃないかといって、相変らずパーを出している。それを見ていた先生が子どもを連れてきて聞いてみたところ、両方とも団地の子で、教育ママさんで、子どもは一番先覚えるのはパーだと、そこで、両親はいつもグーを出してやるらしいんですね。そして、また坊や勝ったと、頭をなでてやるらしいです。これは、あまり笑えない現実があると思うのです。じゃんけんだけじゃないです。他のことにおいても、集団の中に入れば、自分も負かされることがあるんだということを、ちっとも教

えてないわけですね。保護だけです。自分の子に勝たせていけば、平和があると思っているのです、一番不幸な子どもを作っているわけです。つまり、京都の松田道雄さんがいうところの「密室保育」です。外の空気にちっともふれさせない。こういう甘やかしが、日本にあるのです。

アメリカのお母さん方に、子どもをぶつことがあるかと聞くと、大抵のお母さんが、子どもはぶたなきや育ちませんといひます。それでは、あなた方はぶたれた記憶があるかというところ、それはないという。要するに、子どもというものは、はい出した頃から二才位までは、言葉で注意してもだめで、動物的な反射で、物事を教えるより他にないんですよ。もう記憶が残るようになる三つ頃からは話し合いでいけるのです。口で注意してやれるわけです。日本では戦後、子どもの人格を尊重してとか、子どもの願いを願いとして、とかいって、いたずらに甘くなったといえないことはないと思います。

それからもう一つ。お父さん、お母さん、先生方が集まっておられる時に、あなた方は、自分の子どもに、どんな人間になってもらいたいですかと質問しました。そうすると、東部でも、西部でも、その質問はよくわからないという返事です。だから、日本では、子どもに銀行家になってもらいたいとか、弁護士になってもらいたいとか、いろいろな願いを親は持っているんだといひま



したら、そんなことは、自分で決めることじゃないかというので  
す。このところが、私、ちょっと違うと思いましたが。子ども  
が将来、技術屋になろうと、財界に入ろうと、政治家になろう  
と、それはその子自体が決めるんだということです。親が何願っ  
たって、そうなるもんじゃない。ただ子どもが、その人生航路を  
選択できるように、親が、十八才、高校を出るまで、全責任を持  
って、子どもの教育に当たるのだとっていました。

ここでは、人によって、解釈が違いますが、日本の家庭では、  
べたべたかわいがっておいて、学校に連れてきて、先生よろしく  
お願いします。躰けもできていませんでなごといって試験勉強で  
もなんでも、学校におしつけておいて、うちの子にえらくなつて  
もらいたいと一生懸命願っているんですね。アメリカじゃ子ども  
の人格を尊重して、子どもの人生は、子ども自身が決めるんだ  
と、そのところを大きくつっぱねておいて、それまでには、木  
目の細かい躰け、社会人としての躰けを家庭でやっている。そこ  
のところ、違う点じゃないかと思つたのです。

それは皆さんが、御専門で、勉強していらつちやると思いますが  
ので、今度は世界の教育の方へ移りたいと思います。

#### 四、世界教育競争時代

私が五年前アメリカにまいりました時は、アメリカが教育改革

に打ち込んでいた時です。アメリカは今も教育改革を続けており  
ますが、教育の現代化、近代化という言葉は、アメリカの教育界  
を風靡している共通の言葉です。

そのきっかけは、一九五七年、ソ連の人工衛星スプートニク  
が打ち上げられた時、アメリカが世界一だと思つていたのが、宇  
宙科学において、ソ連に遅れをとつたところから、全教育  
界の反省が要望されたのです。どういふ点に教育改革が進められ  
たかと申しますと、第一に科学技術時代に入って、理科と数学の  
教育に力を入れるということです。ところが、アメリカにおいて  
も、理科とか、数学を教える優秀な人は教師にはならないで産業  
界に入ってしまうわけです。従つて、理数教師には、国家で特別  
手当を出しているのです。まあ、非常に理数教育に力を入れてい  
るわけです。それからアメリカでは、イングリッシュの教育に非  
常に力を入れているのです。つまり、科学教育をする時に、国語  
が弱かつたら、なんにもならないということです。

前東大総長の茅先生も、科学教育をするのに日本語ができなく  
ては、科学技術教育はできないといつておられました。同じこと  
を、ロスアンゼルス の全米教育者協会の大会で小・中・高の先生  
二万人ばかり集つておつた時に、記念講演をしたカリフォルニア  
大学の地球物理の若い先生が、開口一番、いっていました。

「どうか、科学技術にすぐれた人を養成しようと思つたらば、イ

ングリッシュだけしっかり教えておいて下さい。へたな理科教育をする必要はありません。あなた方が今教えている理科や物理は明日ひっくり返るかも知れない。今日の科学技術というものは、その位のスピードで進んでいます。それについていくには、しっかりした語学、国語というものを教えておいて下さい」

とにかく、日本においても、訳された古典的な科学技術の文献があるわけですね。それを論理的に読みこなす読解力がなければならぬわけです。また実験、観察をした時に、科学的に正確な文章が書けなければ、科学にならないわけです。どちらかということ、日本の国語教育においては、情緒的な文学的な教育が先に立って、科学的な論理的な語学というものが、日本の国語教育で遅れているのではないかと思います。だから、茅先生の言葉を思い出しながら、私は、アメリカの国語教育というものに、大変関心を持つようなわけです。それから、アメリカが世界を相手に、世界政策を持っている以上当然ですが、外国語にも力を入れていきます。外国語、ロシア語を教えられるような人は、これまた教師にはならないので、特別手当を出して、人員を集めています。次に歴史教育ですが、世界のリーダーとしてのアメリカは、世界の歴史を勉強するのに力を入れていきます。それから、秀才教育ですが、これはアメリカで非常に急いでいるところです。秀才教育ということとは、一定の教育をしている中で、頭が良すぎる子ども、

(私は、これを精薄児に対して精神濃厚児と呼んでいます)そういう子どもの教育をアメリカは非常に急いでいるのです。まあ、そういうことがあってですね、日本も戦後やってきた教育に対して、新しい改革がなければならぬと思います。

以上のようなアメリカのようすを見て、今度は、私は、後進国というものを二年前見て来たのですが、東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカの一角を見てみて、はつきりいえることは、世界は教育競争をしているということです。つまり世界教育競争の二つの姿が、先進国と後進国を見た時に、見えるわけです。

一つは、東南アジア、ラテンアメリカ、いわゆる、under developed あるいは progressing country とかいわれる、これから進歩しつつある国へ行ってみますと、義務教育をいかに早くするかということですね。私は、ブラジルの数ヶ所で講演させられました。ブラジルの人たちは、日本があの大きな戦争に敗けたのに、どうして、あのビックリするようなオリンピックができたかという点に感心し、経済成長に感心します。それがみな、明治五年の学校制度を取り入れたためだと思ひ、明治から百年でここまで来たということに、ブラジルばかりでなく、アフリカでも、東南アジアでも、みんな日本をマークしております。日本の明治にならおうじゃないかと。ところが、私は、日本は百年にこんな努力をしたという話をするのですが、一つだけいえないことがあるので

す。それは、日本は百年でここまで来たのではないのです。

明治五年の近代学校制度を取り入れる以前には、武士の子は、藩校（今の大学）、郷学（郡の学校）そして、庶民には寺小屋があつて日本の子どもはちゃんと勉強させられていたのです。明治の学校二万作る時に、寺小屋は三万あつたんですからね。つまり、近代的な教育の基盤はちゃんとできていたわけです。ですから、あのスタートができたのでしてね。今日の東南アジアや、アフリカなどで見ても、とてもその基盤がないのです。ですから日本の真似をしないなんて、大きな顔をしています。あれはできっこないんです。しかし、賢明な国ならば、明治百年かかつたところを、半分か、それ以下でできる方法があります。それは、テレビジョンです。視聴覚教育です。私たちは文字からしか、勉強できなかつたのですけれどね。今のアフリカなんか見ていると、アフリカの母親教育、衛生的な赤ん坊の扱い方など、テレビでどんなできています。そういうことで、明治百年なんていつている間に、むしろは、二十年で成長するということがありますね。また、メキシコの場合は一番望みがあるのですが、私が五年前に行った時は、乞食がいっぱいいいたもんです。それが二年前行つてみると、土木建築が非常に進んでいて、見違えるようになっていきました。それは、ボデーという、UNESCOで有名な人ですが、その人が、全国の義務教育の徹底を図っているのです。今申

しましたように、これらの国々というものは、そのように教育競争をしているのです。

一方、先進国、米、ソ、英、仏、日本も含めましょう。そういった国の教育競争は、ただ一つ、天才的な頭脳をいかにして、早く養成するかということです。今日の科学技術の基礎には学問がなければならぬはずで、その学問が、実際の生活の中に、あるいは技術として生きる場合には、非常に正確な電子計算機などがあるわけで、それができて、また一つ技術が進み、学問が進むというわけです。話はちょっと横道にそれますが、ソ連の月ロケットは、偶然お月さまに当つたのではないのです。ロケットを月に当てるには、東京駅の屋根の上から、沼津駅の屋根の上のトンボの片目に当てる位の正確さを必要とするのですが、それが命中したというのは、電子計算機などによる正確な計算があつたからです。また、電子計算機ばかりでなく、それを命中させるには、その基礎にたくさんの学問があつたということです。そのたくさんの学問を研究してくれる天才を養成するというのが、今の先進国間の教育競争です。

そこで、日本の教育はどうなければならぬか、根本的に改革しなければならぬ点はどこにあるかということ、私なりに述べさせていだきたいと思ひます。

(つづく)

(日本幼稚園協会主催幼児教育講習会講演より)